

---

# Etude 「Rebellatio」

宇治総

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Etude 'Rebellion'

### 【NZノード】

N9338F

### 【作者名】

宇治総

### 【あらすじ】

ローランドロープの青い雪をかき分けて、貧しい少年は施療を求めて教会堂を訪う。妹を治してくれる神父はおらず、代わりに扉を開いたのは見知らぬ二人の女であった。

(前書き)

原作 ひとり雨著「反抗者」  
グループ小説第二十一弾「リメイク企画」 参加作品。

アンノ・ヌリイ  
主の生誕より 一三一九年 イングランド 冬

チエシャー北部、ローンドロープのはずれに、青い雪を被つた白ア  
蝶樹の森を背にひつそりと佇む、ささやかな聖堂がある。

月は顕わに雲も見えず、あたりは夜とも思えず仄あかるい。一面の雪は星辰の耀いを吸つて、おぼろな寂光を放つていて。

堂へと続く路には蹄跡ばかりがほつほつと続いていて、雪を搔いた形跡は窺えない。訪うものの根雪を破る跡もまたしかり。この聖堂に最初に鑿を入れたのは、珍しくもいと敬虔なるベネディクト会修道士の一介であつたと聞くが、その厳しい会則とともに、彼の遺業もいまや忘れ去られて久しい。

この神の家を守る教区神父、夜はおしなべて不在であつた。朝は前後不覚の高鼾。昼はにじつたワイン片手に高吟し、夜はラバに跨つて意氣揚々と出かけていく。情婦の腹上で聖句を唱えるためである。時課は忘れ去られ、聖人伝は酒の染みにまみれ、聖トマスの像は俗埃にまみれた。ひとも神もここにはいなかつた。

悪魔でさえ訪うにためらおうかとも疑われる、十字架を戴くばかりの冰室。今宵も例に漏れず無人のはずなのが、鉛硝子の色彩窓からぼんやりと、蜜蠟の灯す火のあかりに晒された、しげい女の顔が歪んで見える。

だれかいるのである。

「リリー、まよい子が」と、窓を仰いでいた女が言つた。

応えるものはいない。すきま風の這入る廊内はしんとしている。ややあつて曇つた音が寂寞を小さく搖るがした。遠く白蝶樹の木叢からこぼれた雪か、この非常の刻限に懺悔を乞うひとの足音か。少

し風が出てきたようであった。

「リリー。リル、まよい子が」

「「じどもの血の匂いがする」

「まよい羊の血の匂いが。退屈は紛れて？」

「わたしたちと同じかな。神父さまにご用かな」

「懺悔にはちょっと遅いようよ。屋根を借りるのかしら。でも退

### 〔屈は紛れるわ〕

陶製の聖トマスの坐す、古い祭壇の前に女が一人立つてゐる。くすみきつた銀の燭台を右手に、王后のような緋色織の袖長衣で装つたのと、それに鏡あわせの造作のが今ひとりと。こちらは黒貂の外套を地面に引き摺り、同じような燭台を左手に持つてゐる。血の気のない青白いかんばせに、揃いの紫紺のまなこが長いまつげを上下している。

その際立つた容色！ ひどが見ればなんと思つだらう。聖アグネスとクララの、精巧なる彫像にすがたと見紛うて跪くであらうか。動いているところを見なれば、それはとても人とは見えぬ美貌であつた。

「わくわくしちやう」「う

と、黒いほうが言つたなり、入口の木の扉が一度、どんと鳴つた。扉は極めて薄い。一人のいるところから見ても、衝撃でかすかに撓たわむのが見て取れる。訪いびとは扉を蹴つたらしく。

ややあつて、扉がぐぐもつた声で「開けてください神父さま」と言つた。

率先して動いたのは黒いほうで、彼女が歩くと足下でなにかがりがり引き摺る音がした。赤いほうが燭台を祭壇に置いて、「開けてください神父さま」と真似て独りごちた。

扉が開かれると風が吹き込んで、蜜蠟のロウソクの一、二本が帽子をなくした。黒い女が抱えるようにして、訪いびとを奥へと案内する。十くらいの瘦せこけた少年で、背せなにいま少し幼いこどもを負うてゐる。染め斑むらの目立つたない毛織服は古着である、その短軀にはややあま剥ベールつた。

「神父さまはね、お仕事でお留守。」まつたまつた

黒い女が戯れかかって、少年の髪の毛をわしゃわしゃ弄りだした。  
「わざわの栗毛を梳ぐ纖手の、右の小指は見当たらぬ。

「リルおやめ」と、赤い女が口だけたしなめた。「<sup>アーヴィングス・ディ</sup>神の子羊は眠る時間よ、ぼうぜんじしたの」

少年はしばらくの間、女たちの偉容の前にへどもどしていた。

「Hミーが、Hミーがとても悪いんです」と、少年はようやく口を開いた。「Hミーを診てください。神父さまはいないんですか？」

「神父さまはいなんですか？ 神父さまはジルがたべちゃつた」「黒い女 リルの魔手が今度は背の幼子に伸びた。

「わあ、ファルシフィカートウス！」

「やめてください、Hミーは具合が悪いんです、グッド・レイディ、やめてください」

と言われると、リルはますます「ファルシフィカートウス！」と嵩にかかるふざけだした。その態から類推したものか、身分ある女という認識があるのだろう、やめてと言う少年の拒絶は、しかし控えめである。Hミーは髪の毛を弄られてもなされるがまま、微動だにしない。薄田をあけて頤を反らせて、鼻孔からは乾いた鼻血が轍をなしている。滋養の不足からくる血の病で、その身を負う少年にも同様の症状を見て取れた。

「主よ哀れみ給え、キリストよ哀れみ給え……」

リルの攻勢はやまず、少年はとうとう泣きながらキリストを呴きだした。少年がしゃくり上げるたびに、Hミーの骨ばった腕が力なく揺れる。主よ哀れみ給え！ 彼は知るまい、その背に憩うものに息はなかつた。

「神父さまはお留守よぼうぜ。主の従僕は忙しいの。お休みを貰えないから

「でも、でもまた診てくれるって言つたんです。御礼ももうしたんです」

少年はつかえつかえ、半月前に家族が病んだこと、両親と兄

は助からなかつたこと、妹の容態もよくなないこと、神父が親切に診てくれたこと、代価として豚二頭と絹の靴下を引き取つていったことを、「えし」語彙で打ち明けた。ジルはここにしながら「主よ哀れみ給え」と宣つた。

「それはきっと御礼が足らないのね。もひとつ差し上げなくけりや。きっとお金ね、十ポンドも払わなきや」

袖で鼻水を拭うと、少年は垢光りする小袋からなにかを掴みだしてジルに示した。悴んで血のいろの失せた手のひらに、ペニー銀貨を半分に切断した小片がひとつ。赤い女は腹を抱えて涙を流さんばかりに笑つた。悲しいかな、貧しい少年はポンンドといつ金額を理解しなかつたのである。

少年は真つ赤になつて「それしかないんです」と言つて泣いた。

「お金がなければ神父さまはお困りだわ。仕方ないのだし、お帰りなさいな」

「ヒミーを診てくれるつて言つたんですね……」

「それしかないんです！」と言つてふたたびリルが絡みだした。少年は必死に妹を庇いながら、「ヒミーを助けてえ」と顔をぐしゃぐしゃにして泣いた。

「お金がなくつて、それでも助けて欲しいなんて、都合がいいわ」と、ジルが囁く含みに言つた。

「都合がいいわ。都合つてなあに？」と、リルが和した。

「神さま助けてえ」と、少年はその場へたり込んだ。持たざるものは打ちのめされた。妹が背中から滑り落ちて、地面に投げだされた。

「そうねえ、お金がないなら、じゃあ代わりになにが用意できるの？」

少年はしづらのあいだ黙つて、再び小袋を漁つて、震える手でしおい小さな十字架を差し出した。銀ではない、安物の白鑑ブローチである。金錢としての価値などほとんどない。無論、財貨の代わりに差し出されたものではなかつた。

赤い女の笑みがたちまち消し飛んだ。黒い女は相棒の様子を見て、一拍遅れでそれに倣つた。おお見よ、魔性の娘たち！ 少年は妹の為にその信仰すら犠牲にしようというのだ。

一人の女は真顔で、お互いの麗貌を見合せた。

「……じゃあ、なんにもなさそだから、まづやの右腕をいただこうかしら」

少年は懶げに面を起こした。色濃い困惑が見て取れる。

「差し出すものがないひとは、せめて誠意を見せなきや。まづやもそう思つわね。その子を助けたいなら、ぼづやが、自分で、ぼづやの右腕をちよん切るの。できて？」

「がんばれ、おちびちゃん。これ使ってね」

少年の膝元に鞘がらみの短剣が投げだされた。二人の女はにやにや笑つている。短剣で腕が切れようものか。切れたとして、それが妹を救うぞのような手段に変じるというのだろう。

彼のあばらの浮いた小さな背が激しく震えだした。今度は妹の体に代つて、この不誠実な女どもの垂らした有るか無きかの一縷の望みで、とうてい耐えきれるはずもない痛苦を結わえたものを、誰の助けもなく負う覚悟を強いられたのである。代わりに負うてくれる親兄弟はすでに亡く、せめて決断の責めを引き受けてくれるものとていない。背後には妹が横たわり、眼前には剣が転がっている。この逡巡する幼子の精神の耐えるに余つた。

「おやり。エニーを助けたいのなら、おやり。でも馬鹿げてるわ。腕をちよん切つたらきっと死んでしまうわ。自殺者の末路は地獄よ」

「馬鹿げてるわ。いたいからおやめ。血がでるよ。血が出たらちよつとちょうどいい」

ふたつの朱唇は笑みに歪んでいたが、紫紺の眼はらんらんと少年の拳動を覗つていて。少年がおもむろに短剣の鞘をはりつと、嘲りとも嬌声ともつかぬ声があがつた。病を疑うほどに震えて、肘の下あたりに宛がつた剣の切つ先は乱れにみだれた。

悪魔も耳目を覆え！ 名ばかりの神の家は無垢なるものの呻吟と

血に満ちた。少年は自らに「一度剣を突き立て、三度肉を切り裂き、  
ために一度骨を咬んで刃は捲れた。数え切れないほどの躊躇と諦念  
が起こり、同じだけの勇気の発露と奮激があり、それらが物の数に  
ならぬほどの大いなる苦痛が、小さな体を責めさいなんだ。聖堂の  
床を浸すのは偏に、ただ少年の妹への愛のみであった。

「骨が切れない、骨が切れない」とひとつ叫んで、少年はついに  
短剣を取り落とした。大量の失血で手足は雪の白きに、おびただし  
い流血が射るほどに目に朱い。涙と鼻水と涎が糸を引く、伏せられ  
たその面は、しかし益なき自傷行為を悔いる色は見受けられず、た  
だ愛するものを救い得なかつた自責だけに占められていた。

「本当に馬鹿げたこと。ぼうやはわたし達が嘘をついていると思  
わないの？」

少年は黙つたままである。

「後悔していくね？　本当に愚かしいことよ、ぼうやはきっと後  
悔していくね？」

少年はなおも黙つたまま、力ない指先で床を探り出した。それが  
短剣の柄を目指しているのだと判ぜられたとき、二人の女はふたた  
び卒然と顔を見合わせた。

「リル手伝つてあげて。もう十分」

「わたしほんとうにやると思わなかつた」

リルが外套の裾をぱつと撥ねると、そのほそい腰にはいかにも釣  
り合わない、金で飾られた剣帯が露わになつた。太い柄を握つて大  
きく踏み出して、抜き打ちに少年の腕を斬り飛ばす。少年の叫びは  
ごく小さく、鞘鳴りの余韻がそれを隠した。

黒い女が剣を拭う隙に、赤い女は堂に隣る神父の住まいへ飛んで  
いき、汚れた盆と木の杯と、二脚の簡素な椅子を携えて戻ってきた。

「リリー、ぼうやの口を塞いでいてね」

ジルは忙しげに、エミーの体をあいだにして椅子を向かい合わせ  
に配し、少年の腕を拾つて持つてきた杯に血を絞つた。少年は朦朧  
として意識も定かではない。

「おちびちゃんは喋っちゃダメよ。わたしも喋っちゃダメ?」

「喋っちゃダメ、絶対」

腕を盆に乗せ、それをエミーの薄い胸のうえに乗せると、ジルは静かに椅子の片方に腰掛けた。少年の血は止まらず、もはや生きているものの反応はなにも見いだせない。この小さく痩せこけた器のどこに、これほどの血潮が流れていたのであるつ。少年を見るジルの瞳に、嘲弄<sup>ちようろう</sup>のいろはもはや窺えなかつた。

「ぼうや、よく堪えたわ。よく頑張ったわ。よくこれだけの財産<sup>プロクセネータ</sup>をこしらえたわ。あとは代言人の仕事」

と呟いて、ジルは目の前の椅子に向かつて姿勢を正して、着席を促すような手振りを示した。

突然、あやなす色彩窓のキリスト像が粉碎し、入口の木の扉<sup>くつ</sup>がものすごい勢いで消し飛んでいった。堂内に颶風<sup>くふう</sup>が起<sup>おき</sup>り、須臾<sup>しゆゆ</sup>のちぴたりと絶えた。明かりという明かりが失せた。ジルは乱れた衣服や髪もそのままで、血の杯を膝のうえに乗せて黙然と座っている。リルが少年の口を塞いで、ついでに自身の口も手で覆つた。ジルの対面の椅子に、黒いもやもやしたなにかが漂つている。長い時間をかけてそれは濃くなり、濃くなるだけジルの緊張は田にも明らかにいや増した。

無音の堂内にかすかに、犬がなにかを嗅ぎ回るような連續音がある。ジルがふたたび「どうぞ」というふうにして命図すると、エミーの頭上に集まつた黒いもやから、

「ど二だ、ど二だ」

声がした。ずっと遠くから大声で叫んでいるような、耳に当たる微風のよつな、ちょっと聞き取りにくい声である。

「…………」

「ど二だ」

「…………」

黒いもやはしきりに「ど二だ」を繰り返したが、ジルは杯を握つたまま沈黙を貫いた。リルは少年を抱き抱えて、物音ひとつ漏らす

まこと縮こまつている。

ややあつて「どこだ」は止み、重苦しい静寂が堂内を訪れた。ジルはもやが黙るのを見計らつて、持っていた杯をそつと皿の前に突きだして、中身をすこしだけ床にこぼした。

もやは「ふーん」と思案するよつたな声をあげた。

「ふーん。のどがかわく」

「……」

「こどもだ。みおぼえがある」

「……」

「これにはほんもの アウテンティクス  
フルシフィカートウス」

「にせもの」

ジルのひと言が絶妙の機で、黒いもやの言葉に被さつた。もやはちよつと言葉を切つて黙つたあと、

「をいれておいたから、ふーん、しんでいるわけだ」

感情に泣き声で言った。

「このこは……ここる。こいつではましげ、こいつではまどともやすい」

「たかい」

「から、じゅうぶんこいつあつ。ふーん。ちもじつこくろこ

」

「あかい」

「あまさうだ。これではまこいつではない」

「でよう」

「どこだ」

「……」

今度はもやのほうも押し黙る。椅子が細かにがたがた鳴り、嗅ぎ回る音は荒々しい鼻息のようなものに変わつてゐる。ジルは一度ほそく深呼吸をした。吐く息も杯を握る手も震えていた。

「……」

突如、ぐしゃっと音がして、もやの座つていた椅子が粉碎した。

もやがぐわっと膨張して、怒れる獅子の唸り声のよつた声をあげて、ジルの田の前まで迫つてくる。ジルも負けじと椅子を蹴立ててぱつと立ち上がり、もやに挑戦するよつに指を差した。

「神の忌むべき自殺！」交渉者は地獄へ墮るだらう！」

「神の褒むべき犠牲！」交渉者は天国へ昇るだらう！」

寸分も違わぬ機で、もやの呪いの言葉にジルの言葉が被さつた。もやはいよいよ堪えかねたように「どこだ！ どことだ！ くそ！ その不実なあたまを食いちぎつてやる！」とわめき散らす。もはや前の微風の「」とき声ではない。丘匹の獅子が一斉に吼えかかつたよう、身の毛もよだつ咆号が、すぐ田の前のおやかな女をなぎ倒さんとばかりに浴びせかけられた。

ジルが田を硬くつむつて震えている間に、獅子の咆号は徐々につなり声となり、鼻息となり、嗅ぎ回る音となつて終熄していった。ゆつくりと田を開けると、すでに椅子のつえの黒いもやはいない。盆のうえに少年の腕はない。Hミーの胸がかすかに上下して、木の盆は床に滑り落ちてこんと転がつた。交渉は成功したのであつた。

「ジル、怖かつたねえ」

鞘の鎧をがりがり引き摺りながら、リルが及び腰で近寄つてくる。外套に半ば隠すよつにして抱えられた少年は、すでに生き物のいろを失つていた。

「本当に、悪質だわ、こここの神父さまは。あれほどのものを養つていらしてよ」

「Hミーちゃんは大丈夫？」

「取引は成功よ。それよりぼつやだわ。ぼつや」

呼びかけられると、少年はうつすらと田を開いた。その面はすでに蒼白である。体中の血のほとんどが抜け出てしまつていながら、しかし少年は平生の通り、ことさらに支障を感じたふうはない。

「ぼつや、Hミーが見えて？」

「Hミー、Hミーを診てくれたんですか？」

少年の問いにはいられず、ジルはただにっこりと微笑んだ。

「ぼうやが用意したもので、この子の命を、<sup>あがな</sup>購つたの。ぼうやは

本当によくやつたわ」

「……よくわかりません。ぼく、お金も持っていないの」

「ぼうやの右腕にはね、それだけの価値があったの。ぼうやはたくさん痛い思いをして、たくさん勇気を出したから」と言って、ジルは糸が切れたように床に尻餅をついた。全身の震えはいまだに治まらない。

「神父さまは、お帰りですか？」

「来たけど、また出て行っちゃった。すじに怒つてたよ」と、リルが答えた。

「御礼をしなきゃ」と言つて立ち上がりとした少年の腕を、ジルがやんわりと押し留めた。

「よくお聞き、ぼうや。あの神父さまの中にはね、悪魔がいてよ」

「神父さまに？」だつて神父さまですよ

「神父さまだって人間なの。悪魔にあつたじつけ、いつかこいつて言われば、そうしてしまつの」

少年は目を閉じて、持つていた小袋のなかに手を突っ込んで、白鐵の十字架をそつと握つた。少年は素直に驚いた。ついさっき触つたときには氷のようだったのに、どうしたことだらう、今はまったく冷たさを感じないのである。

「悪魔はとても親切に見えるの。ぼうやのお父さんお母さんも、お兄さんも、きっと神父さまに感謝して」

「死んじやつた。死んでいました」と言つて、少年はその幼い瞳に一瞬、淡い叡智の光をきらめかせた。「ぼくも、ぼくも……」

ジルは応えずに、静かな寝息を立てるヒーラーを見やつた。薔薇色の頬。内なる太陽の反射のような血の温み。ああ、懐かしい、憂わしい、輝くその瞳！ 彼女が遠い昔に捨ててきてしまつたすべてが、そこに横たわつていた。

「おちびちゃんにあげるね」

リルが纏っていた外套を脱いで、エミーの小さな体を丁寧に覆つた。外套ひとつでエミーの体を购えたら、どんなにか良かつたろう。ジルもリルもそう思つても、それはついに夢想に終わった。それはまさしく悪魔の所行であつたから。

「そうよ、ぼうやは死んだわ。でもこいつして動いている。なぜだかわかつて？」

少年は無言で首を振つた。ついでにリルもそれに倣つた。

「大事なことを言つから、よくお聞き。ぼうやはね、わたしを仲介して、悪魔と対等の取引をしたの。悪魔は人間とは絶対に対等な取引はしない。ひと抱えの宝石も、彼らは砂粒ひとつで购うの。そうして、人間にはそれが正当な取引だと信じさせるの。悪魔と対等の取引ができるのは悪魔だけ。悪魔は悪魔を欺かないから。だから、悪魔は悪魔とは取引をしないの」

少年は混乱の極みにあるようだつた。「今はわからなくてもいいわ」と言つて、ジルは後を続けた。

「でもほんのごくまれに、取引の相場を偶然知りえたひとが、ほんとうにうまく立ち回つて、悪魔から価値の高いものを得ることがあるの。そういうひとはね、たちまちに神さまからそれは重いお罰けいひを蒙るの」

「お罰つて」

「ぼうやは、いえ、わたしたちはね、天罰を蒙つたから、もうօ日さまの下にはいられない。おいしいものも食べられないし、飲めないの。もう一度と眠くならないし、土にも還れないの。火に当たつても暖かくならないし、春も夏も凍えなければいけないの。どんなに悲しくたつて辛くつたつて、もう涙はでないの。そうして、そうしてね、そうじやないひとたちが堪らなく羨ましくて、嫉ましくて、憎らしくなるの」

「ぼくも？」

「ぼうやも。ぼうやはね、もう人間じやないわ。悪魔のようだけれど、悪魔の法に叛そむいたから悪魔でもないわ。あるひとは罪人なんペッカートル」

て呼ぶわ

「Hミーは？ Hミーもそつなんですか？」

「Hミーは大丈夫。でもぼうやはひもつHミーの傍そばにまづりれなく  
てよ」

「どうしてー」と言ひて、少年は妹の傍らへと這つてこいつじ  
た。「いやだ、もうHミーはひとりぼっちなんだ。ぼくがついてな  
きやー！」

そう言つ口に反して、少年は妹の数歩前で勢いを失つた。なにか  
信じられないようなものを見る目で、妹の顔をしげしげと見つめて  
いる。

「ぼうやはひもわかつていてね？ もうHミーはHミーに  
見えない。Hミーにとつてぼうやはさつきまで兄であつたのと同じ。  
ぼうやは今のHミーは妹じやないの、妹だつたひとなのよー！」

少年は泣いた。彼にはもうなにも聞こえないようだつた。床を搔  
きむしつて痛哭し、あまりにも受け入れがたい眞実に五体十指を振  
りまわして抗い、転げ回り、あらん限りの声をあげてかつての妹の  
名前を叫んだ。父の母の兄の名前を叫んで助けを求めた。少年は哭  
いた。振り絞るよつにして流した血の涙は、床に落ちるまえに金の  
粒となつてぱらぱらと散つた。

彼の体に残つた最後の血の一滴が失われたとき、よつよつ少年は  
その紫紺のまなこを上げた。床に散らばつた金の粒　己の命の最  
後の燃え残りを搔き集めて、少年は自身の垢光りする袋に詰めた。

「Hミー、Hミーや、さよならー。ぼくはいかなくちやー。こ  
れを持つておおき、ぼくの代わりだと思つて」少年はぎゅうぎゅう  
に詰まつた袋を妹の衿にねじ込んだ。「こんなことつてあるのかな  
あ。ぼく、お前があんなに好きだつたのに、ぼくにはもうお前の顔  
がわからないんだ！」

赤い女と黒い女が少年の肩に手を置いた。じきに日が昇る。神の  
家を発つときが来たのである。

「ぼうやはひもつ、お別れは済んで？」

ヒリーは黒貂の毛皮にくるまつて寝息を立てている。少年はまるで落としてしまった自分の命を探すようにそれを眺めていたが、やあつて「はい、もういいです」と言つた。

「神父さま、帰つてこなかつたね」とリルが言つた。

「これからどこへ行くんですか?」と少年が聞いた。

「陽のないところ。月のあるところ」とジルが言つた。

「そこはちよつと暗いかも知れなけれど、歓迎してくれるもののはきつとあつてよ。わたしたちの仲間もいる。そこでもし気が向いたら、ぼうやにそつしたよ」わたし達のかつての仲間たちを助けてあげましよう。それは大きな代償を伴うけれど、きっとお互に後悔はしないわ。ぼうやは後悔していて?」

「ううん、後悔してません」

「ぼうやの名前は?」と言つて、ジルは少年を抱きしめた。

「エルクっていうんです」

「そう、エルク! あなたを歓迎するわ」ジルもリルもにっこりと笑つて、そして二人でまったく同じ文句を口に上した。<sup>のぼる</sup>「そしてようこそ、われらがコッレギウムへ。小さな叛逆者よ<sup>レベッラー・ティオ</sup>」

翌年の春、ローランドローパーに新しい神父が赴任した。

前任者は謎の怪死を遂げている。胴体と右腕以外のすべてを切り取られた無惨な姿で、彼は半月後に村人に発見されたのであつた。加害者は杳として知れず、ただ彼が死後握っていた、遺留品と思しきもの一点が残るのみである。粗悪な鎌打ち貨幣ではなく、周到に鋳られた一枚の金貨。ピザンティン金貨より一回りも大きいそれには、ラテン語でこう記されていた。

Dイーa dエクストラムe Xミセーローt r a m i s e r o 哀れな者に救いの右手

を、という意味である。

(後書き)

ローンドロープ ローンドロップ ローンドロップス ローンレイ  
ン ひり雨。

書き終わってみれば、なんだか原作からかけ離れた代物となつてしましました。壁台骨は代えずには上げたつもりです。でもあくまでつもりなんで、うん、仕上がつてません。

まず原作の舞台設定からして根底から変えちました。原作にビルやライトや手術台（と思しきもの）が出てきたので、「こら近代物だべな……」と思っていたのですが、なんとリル女史が剣を持ち出したじやあつませんか。「アーラこんオナゴおらがタイプだべる。」いふたらモン振りまわしてえ」てなもんです。ビルさん、ライトルさん、手術台氏には申し訳ないことをしましたが、「剣が出てきてもおかしくねえ設定にすっぺ」との判断により、思い切つて中世代のイングランドを舞台としました。名前もジルリルはそのままですが、エクスをエルクに、エミリアをエリーに変えてあります。

短編は初めて書いたのですが、一番きつかったのは字数制限！なんとかこうとか形にはしましたが、言葉を削った部分も多く、ルビも最低限しか振れなかつたので、かなり読みづらいものになつたかもしれません。多分に憾みの残る作品となりました。

最後の「コッレギウム」は組織とか組合とかを表わす言葉です。コッレギウム組織なんて書くといわとか陳腐になるので、あえてそのまま書いたんですけど……それにしても、あんなのがあとどれくらいいるんじょうね。

聖トマスやらアグネスやら時課やらといつタームは、説明していると自己満足に終わる恐れがありますので、単純にキリスト教の風味として聞き流してください。

最後に、原作者のひとり雨さんにはある意味申し訳のない仕儀となつたような気がします。もし原作を大きく歪曲したことについて、ひとり雨さまが不快感を覚えられた時の用心に、先手を打つてお詫び申し上げます。また原作を練習作として転用させて頂いたことについて、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

かし

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9338f/>

Etude「Rebellatio」

2010年11月7日23時51分発行